

人権通信

2 学期末号 平成18年12月18日発行

香川県立坂出高等学校：人権・同和教育部

11月の半ばに、文部科学大臣から子どもと、大人向けにそれぞれメッセージが出されましたが、今日いじめの問題は大きな社会問題となっています。本校でも1年生の学年団集会で、生徒といじめ問題について考えてみました。その参考としたのは、『葬式ごっこ 八年後の証言』（豊田充著 風雅書房）という本です。この本は、「中野富士見中学いじめ自殺事件」の8年後を取材したものです。

1986年2月、東京都中野区の中学生在が級友らによるいじめを苦に家出をし、盛岡駅ビル地下街トイレで自殺した。被害者の少年の受けたいじめのなかでも、多くのクラスメイトと一部教員によって行われた「葬式ごっこ」は人々に強い衝撃を与えた。少年の机の上には、あめ玉やミカンが並べられ、花や線香も添えられていた。そして少年の写真の横には「追悼」色紙がおかれ、そこには級友の寄せ書きや「やすらかに」といった担任を含む4人もの教員のメッセージや署名もあった。

被害者の少年の級友が、8年前を振り返って、当時の心情を語っており、いじめ問題を考える資料として、現在も注目されています。この本から、当時の級友たちの声を拾ってみました。

「当時のいじめをどう思うのか？」

- ・テレビのバラエティー番組で、芸人をからかっているノリでやっている。遊びのつもりだった。
- ・からかいの延長だとどこまでやると傷つくのかわからなかった。
- ・日常的な悪ふざけやからかいが多すぎて、感覚が麻痺していた。
- ・まわりのみんなも流されていった。

「いじめを生んだ環境は何だったのだろうか？」

- ・つらい目に遭っている人を助けようとしめない環境が少年を追い込んだ
- ・まわりに関心を持ちたくないという生き方が問題だった。
- ・自分を受け入れてくれる場所がない。どこか裏切られるのではと思っている。この疑心暗鬼の感情から、いじめを見て見ぬふりをした。
- ・自分を大きく見せたいのでいじめに加担した。

「今の生徒に何かアドバイスすることはないか？」

- ・人の生命を支えることは、相手に共感を持って話を聞くだけでも可能だし、楽しく優しい想い出をたつた一つつくるだけでも可能になるのではないか？

「事件を通して考え方は変わりましたか？」

- ・今怖いものは何もない。自分が弱い人間であることを隠す必要がなくなったからだ。
- ・人間自体を軽く見るとか無関心でいる人、人間を大切にしないことか人間に関心を持たないことに怒りを感じる。
- ・今日の状況に通じるところがうかがえます。

生徒たちが、なかまを作り、いじめを傍観せずに指摘できるいじめを許さない集団となるように、学校でも指導に力を入れていきます。

ご意見や情報がありましたら、ご連絡ください。

坂出高校（人権・同和教育担当：真下拓也）

TEL：0877-46-5125

FAX：0877-46-5896

3年生の人権・同和教育ホームルーム

3年生の第2学期人権・同和教育ホームルームでは「結婚差別～幸せな生き方を求めて～」という主題で実施しました。まずワークシート等で結婚についての認識をグループで話し合いました。

📍お相手の方に対する希望プロフィールをお聞きます

Q1 お相手に希望する居住地域は？ <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="checkbox"/> 特にこだわらない	Q4 お相手に希望する学歴は？ <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="checkbox"/> 特にこだわらない
Q2 お相手に希望する年齢は？ <input type="text"/> 歳～ <input type="text"/> 歳 <input type="checkbox"/> 特にこだわらない	Q5 お相手に希望する身長は？ <input type="text"/> cm～ <input type="text"/> cm <input type="checkbox"/> 特にこだわらない
Q3 お相手に希望する年収は？ <input type="text"/> 万円～ <input type="text"/> 万円 <input type="checkbox"/> 特にこだわらない	Q6 お相手に求める上記以外の要素があればご入力ください。

グループで活発に意見交換があり、「考える条件が人によって全然違う」「以外と相手に求める条件が多い。でも実際はどうか」という感想等々。多様な結婚観がみられました。その後、生徒の代表が取材した聞き取りテープを用い部落差別解消に向けて運動をしている方のお話を聞きました。以下はそのお話の一部です。

……結婚をし、長女が生まれたとき、名付けには（夫の）お母さんは来てくれなかつたんです。父親は来てくれたんですけども。でも何十年かたって、お嫁さんが3人いる中で、優しく言葉をかけてくれるのはやっぱり私やいうんで、その時に初めて、「部落差別とかそんな関係ないの」という言葉を聞いたんですよ。やっとわかってくれたんやなっと思って。その時はうれしく感じたんですよ。ありのままの自分で接して行って、良かったなと思いました。

今、先生が最後に、同和教育問題についてかまえてしまうところがあるとおっしゃったんですが、そこは仕方がないんです。しかし、相手の中に自分を投影して考えることができれば乗り越えることができる。今日の話すべてが、最終的にはそこにつながっていくだろうと思います。……最終的に想像力を働かせ相手のことを思いやることによって、人間関係をきちんと守っていき解決できる。…今日お話ししたことをしっかりと自分の中においてください。差別に打ち勝ち乗り越えられるんだというひとつの大きい、いい材料だと思います。結婚後も相手の実家と行き来ができない、墓参りに帰れないというような実態が、現在も依然としてあるわけですね。それを乗り越え、克服していく大きい力となるのが、これからの皆さんのつくっていく社会です。皆さん一人一人の考え方のなかでそこは乗り越えられるようになっていきますから。

……さっきあなた方がいったように、できれば親が理解して結婚したいという気持ちは、十分わかります。それが本音だと思う。ただ、若いあなた達が同和教育を勉強するなかで、親に対して「お父さん、お母さんそれは違いますよ」といった話ができるようになってほしいなあと思うんです。小さい時から、幼小中高と人権問題を学習して、そういった間違っただけの考え方を改めていくという、長く年月のかかる運動ですが、若い方が年配の人たちに対して、どんどん同和教育問題に対する啓発をしてほしいなってことを私はいつも思っております。

（大野真次が担当しました。）